

# 平成 29 年度第 2 回学校運営協議会議事録

## 神奈川県立市ケ尾高等学校

日 時：平成 29 年 7 月 29 日（土） 9 時 30 分～11 時 40 分

場 所：神奈川県立市ケ尾高等学校 中央棟 3 階会議室

出席者（敬称略）

### 【委 員】

○田口 亮（東京都市大学知識工学部教授）○中村 浩樹（神奈川県立市ケ尾高等学校 PTA 会長）○倉岡 正高（地方独立行政法人東京都健康長寿医療センター研究所研究員）○鈴木 秀幸（大場町在住地域住民）○仁井田尊史（横浜市資源循環局青葉事務所長）○福田 晴好（翔凛高等学校特別講師）○田中多恵（NPO 法人 ETIC. 横浜ブランチャマネジャー）○内川 隆（本校同窓会長）○増渕 広美（神奈川県立市ケ尾高等学校長）○坂村 暁（横浜国立市ケ尾中学校長）

### 【事務局】

○奥津 賢一（神奈川県立市ケ尾高等学校 副校長）○佐藤 和彦（同 教頭）○川村 裕幸（同 事務長）○横須賀 真（同 学校運営協議会委員担当）○近藤 駿矢（同 学校運営協議会委員担当）

## I 議 事（司会 副校長）

### 1 開会の言葉

暑さが続く中、委員全員の出席をいただき大変ありがたい。また、本日は傍聴希望者が 1 名出席する。

本日の協議会では、本校の保護者や地域との連携事業について報告させていただくとともに、これからの地域貢献活動の在り方について、委員の皆様からご意見をいただき、有意義な会議としたい。

### 2 会長挨拶（倉岡正高会長）

協議会は、「どういった計画で実施するのか」、「具体的にどのように次のアクションにつなげていくのか」、「結果をどう評価するのか」といった、取組みの計画性と内容が大変重要である。今回は、これからの協議会を進めていくうえで必要な、議論の体裁的なものも合わせて考えていきたい。

### 3 校長挨拶

前回の協議会では本校の概要を説明させていただいたが、今回の協議会では、本校の課題と今後の計画とをどう結びつけていくかを考えたい。

本校は「社会の中核たる人材」の育成を目標に掲げている。コミュニティ・スクール指定を機に、生徒の学びのフィールドをさらに広げ、変化の激しい社会の中でその中核を担い、生き生きと活躍できる資質・能力を身に付けさせたいと考えている。今回は、そのためにできることは何かを考える協議会にしたいので、委員の皆様からたくさんの意見をいただきたい。

生徒の様子を校外の方にお伝えするため、全校生徒に配付している「校長室の窓から」（校長だより）をホームページに掲載しているので、是非ご覧いただきたい。

### 4 報告事項

#### ア まちの未来づくりプログラム（市ケ尾ユースプロジェクト）の活動状況について（教頭）

資料 p 1～4 によって、プログラムの概要と活動状況を説明。

「まちの未来づくりプログラム（市ケ尾ユースプロジェクト）」は、市ケ尾中学・高校の生徒と青葉区役所、NPO 法人が、互いにまちの課題や魅力アップについて考える活動である。

学校及び地域の方々へプログラムの参加について呼びかけたところ、市ケ尾中学校から生徒 17 名、本校から生徒 10 名、地域の方から約 20 名の参加希望が得られた。

7 月 12 日（水）に実施した中高生合同オリエンテーションでは、中学生、高校生が初めて顔を合わせ、「これからの社会で求められる力」の理解を深め合った。

8 月 3 日（木）に実施した企画ワークショップで中高生と地域の参加者が一堂に会し、「まちの課題や魅力アップを考える」をテーマに、今年度の活動を通じて取り組みたい活動内容のアイデアを出し合った。現在、5つのグループに分かれて活動し、3月には、このプロジェクトの成果を発表する予定である。

生徒たちには、中高生ならではの柔軟な発想で、「市ケ尾の魅力アップ」にチャレンジしてもらいたい。また、この活動で得られた貴重な体験を、今後の目標や夢につなげてもらいたい。

#### イ 地域や保護者との連携・協働事業について（平成 28 年度・29 年度現在） （副校長）

資料 p 5～6 によって、平成 28 年度の地域連携事業への取組み報告・及び

## 平成 29 年度の予定、今後の地域貢献活動の概要について説明。

部活動の通年連携・協働事業として、書道部は、平成 28 年度より毎月第 2 土曜日に老人介護施設にて書道交流を行っている。また、平成 29 年度より、剣道部が神奈川県庁剣道部との交流事業を行っている。校内では、予備校や PTA の方々による「キャリアアップ講演会」「スタディーアップ講演会」を不定期で実施している。看護系の講座、英語の多読講座など、生徒の多様なニーズに応じており、大変人気がある。2 学期以降は、理系志望の女子生徒（リケジョ）を対象とした講演会の実施も検討中である。

月ごとの取組みについては資料のとおり。今後も生徒に身につけさせたい力を意識したテーマを提供していきたい。

### 5 協議事項                      ○：委員            ●：学校職員

#### ア 地域貢献活動の在り方について 資料 p 7～9

- 本校における地域貢献の在り方として、昨年度は 10 月に「地域貢献デー」と称して、地域の美化活動に取り組んだ。学校全体で行う活動は年 1 回に留まっており、まだまだ不十分である。地域が生徒に何を求めているのか、生徒の自己肯定感を高める活動とは何か、今後の地域貢献について意見をいただきたい。地域に開かれた、愛される学校づくりを目指したい。
- 地域に対し、自分たちに何ができるのかを、生徒たち自身に考えさせるのはどうか。自主性に欠ける生徒に対しどのような言葉かけをしていくのか、職員の対応も重要である。
- 生徒に、どのようなことがしたいのかを聞いてみようと感じた。できるだけ自分から地域に出て、それらの活動を通じて社会・自然・人とのつながりの大切さに気づかせたい。
- 若いうちからゴミに関心をもつことは大切である。地域の方はゴミに対して問題意識を持っており、地域の方と一緒に街を清掃することは、互いのニーズに合った活動といえる。
- 昨年、河岸に流れ込んだ流木を取り除く作業を市ヶ尾高校の生徒が自ら行ったという話を地域の方から頂いた。このような自主的な清掃活動を通して、地域貢献意識を養っていきたい。

- 地域貢献活動の日程や時間は固定されているのか。やらされてやるのではなく、自分たちで考えてやるのが大切である。例えば、クラス単位で自主的に考え、地域貢献活動についてライバル意識をもたせるのはどうか。多彩な案が出て面白いのではないか。
- 地域貢献も大切だが、勉強中心の日常のカリキュラムをこなす忙しさの中で、自己有用感を持てるほど活動できるのか。何が課題なのかを考えるとともに、その効果も考える必要がある。
- 生徒が自分の特性を理解することが大切である。「社会の中核たる人材」という目標につなげて、地域で貢献していくことで自己有用感の向上に繋がっていききたい。
- カリキュラム上、清掃活動は年1回しかできないのか。定期的に行わなければ効果は薄い。できれば、月1回継続的に何かできないか。例えば、振り込め詐欺の声かけを役所と連携して行うとよい。  
防犯活動で大事なものは、街がきれいなことである。定期的な清掃活動によって防犯効果が期待できる。また、孤立化が懸念される高齢者と若い人が顔を合わせ、話ができる機会をぜひ設けてほしい。
- カリキュラムの許す限り、検討していききたい。地域に貢献することで、将来、社会にどのように繋がっていくのかを考えさせたい。この活動を通して、何がやりたいのかを自ら考えるきっかけとなれば尚良い。一度生徒の話聞き、生徒たちの貢献活動に対する考えを確認したい。
- どういうテーマで行っていくのか、生徒の話聞くなど、生徒自ら考える貢献活動を考えて欲しい。

#### イ 地域資源を活用した生徒の活躍の場の創出について 資料 p10～12

- 本校は「文武両道」のもと、多くの生徒が部活動に参加し活躍している。一方、様々な理由で退部した生徒が、年度の途中から活躍できる場はほとんどない。部活動から離れた理由としては、顧問・先輩等との人間関係、練習量や練習頻度、モチベーションの低下などが挙げられる。ある担任の実感によると、部活動を離れた生徒は目的意識を失い、挫折感が生まれる。その目的を失った生徒たちに対し、再び活躍できる場を創出することが、学校全体で取り組むべき課題のひとつと考えている。その試行的な事例として、ある担任が一部の生徒を対象として実施している取組みが「2017 日経 STOCK リ

ーグ」への参加である。様々な試みを経て、そのような生徒に対し、キャリアの再構築を促せるような仕組みを創っていききたい。

- 大会のある部活動は、出場し、活躍することでやりがい生まれる。しかしその中にある、大会に出ることのできない生徒のやりがいはどうなのか。その生徒たちが何かできる機会があれば課題解決の糸口のなるのではないか。
- バasketボール部やバレーボール部では近隣の中学校との交流を行っている。そういった機会を設けることで、大会に出ることのできない生徒も部活動への参加意義を感じることができる。
- 運動部は専門性が高いので、途中から別の部に入るのは難しいだろう。
- 宇宙飛行士の若田光一氏は、浦和高校時代は野球一筋だった。「3年間レギュラーにはなれなかったが、そこで学んだことは今も大切にしている」と述べている。部活動担当の先生方には、ドロップアウトさせない指導力も必要。
- 教職員だけで、活躍の場を創出するのはなかなか難しい。外部の人に来てもらい協力を得ながら取り組んでほしい。いきなり変えていくのは難しい。
- 地域貢献部があっても良い。すでにニーズのあるボランティア活動だけでなく、地域の課題解決に主体的に取り組む活動にもつなげていきたい。  
早速、できることは取り組んでいきたいが、この課題については、今後も継続的な協議をお願いしたい。

## 6 その他

### 学校評価部会・地域協働部会の構成員について（副校長）

資料 p 13～14 によって部会の特徴や先行事例を示し、本校における「評価部会」及び「地域協働部会」の設置について了承いただいたのち、学校運営協議会委員については、右のように構成員を決定した。

評価部会	地域協働部会
○倉岡 会長	○増渕 副会長
○中村 委員	○鈴木 委員
○田口 委員	○仁井田 委員
○福田 委員	○田中 委員
○内川 委員	○坂村 委員

以上